

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごへんじ

兵衛志殿御返事

かまたりぞうぶつ こと

（鎌足造仏の事）

新版
1483
〜
1484

ひようえのさかんどのごへんじ かまたりぞうぶつ こと

兵衛志殿御返事（鎌足造仏の事）

けんじ ねん がつ にち さい いけがみむねなが

建治 3 年（'77） 8 月 21 日 56 歳 池上宗長

がもくにかんもん むさしぼうえんにち つか た そうら お

鵜目二貫文、武蔵房円日を使いにて、給び候い了わんぬ。

にんのうさんじゅうろくだいこうぎよくてんのう もう おう によにん

人王三十六代皇極天皇と申せし王は女人にておわしき。

とき いるかのとみ もう もの 傲 物 狂

その時、入鹿臣と申す者あり。あまりのおごりのものぐるわ

おうい 奪 振 舞 てんのう おうじとう

しさに、王位をうばわんとふるまいしを、天皇・王子等、

ふしぎ 思 ちからおよ

不思議とはおぼせしかども、いかにも力及ばざりしほどに、

おおえのおうじ かるのおうじとう 歎 たま なかとみのかまこ もう しん

大兄王子・軽王子等なげかせ給いて、中臣鎌子と申せし臣

もう たま しんもう じんりき

に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく「いかにも人力は

叶

見

そうら

うまこ

れい

きようしゅ

かなうべしとはみえ候わず」。馬子が例をひきて「教主

しやくそん

おんちから

かな

もう

釈尊の御力ならずば叶いがたし」と申せしかば、さらば

しやくそん

つく

たてまつ

祈

いるか

とて、釈尊を造り奉つていのりしかば、入鹿ほどなく打

なかとみのかまこ

もう

ひと

のち

かばね変

ふじわらの

たれにき。この中臣鎌子と申す人は、後には姓かえて藤原

かまたり

もう

うちのおとど

たいしよつかん

もう

ひと

いま

いち

ひと

鎌足と申し、内大臣になり、大織冠と申す人、今の一人

ごせんぞ

しやかぶつ

いま

こうふくじ

ほんぞん

の御先祖なり。この釈迦仏は、今、興福寺の本尊なり。

おう

おう

しやかぶつ

しん

しん

しやかぶつ

しんこく

されば、王の王たるも釈迦仏、臣の臣たるも釈迦仏、神国

ぶつこく

右衛門

大

夫どの

おんふみ

ひ

あ

の仏国となりしこと、えもんのたゆう殿の御文と引き合わ

こころ得

たま

いま

よ

たこく

奪

せて心えさせ給え。今の代は他国にうばわれんとすること、

しやくそん

忽

ゆえ

かみ

ちから

およ

釈尊をいるかせにする故なり、神の力も及ぶべからずと

もう

申すはこれなり。

おのおのふたり

ひと

見

各々二人は、すでにところ人はみしかども、かくいみじ

見

たも

しゃかぶつ

ほけきよう

おんちから

くみえさせ給うは、ひとえに釈迦仏・法華經の御力なりと

思

おぼすらん。またこれにもおもい候。後生のたのもしさ申

思

そうろう

ごしよう

頼

もう

すばかりなし。

のち

これより後も、いかなることありとも、すこしもたゆむ

弛

張

上

責

ことなかれ。いよいよはりあげてせむべし。たとい命に及

いのち

およ

怯

ぶとも、すこしもひるむことなかれ。あなかしこ、あなか

きようきようきんげん

しこ。恐々謹言。

はちがつにじゅういちにち

八月二十一日

ひょうえのさかんだのこへんじ

兵衛志殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押